
内親王の彼氏は一般人！！～わかるまでの一年～

枯葉花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

内親王の彼氏は一般人!!! 分かるまでの一年

【Nコード】

N6949P

【作者名】

枯葉花

【あらすじ】

主人公の、美宮響子うつくしみや きょうこは、なんと内親王!!! ひよんなことから、平凡な恋にあこがれて一般の小学校に通うことに!!!

そこで会った、神山拓斗と、とのラブストーリースタート!!!

春

<1>プロローグ

この話は、

「きょうちゃん。きみ・・・内親王なの？」

っていう彼氏の言葉がでるまでの一年をふりかえった話。

あっと、自己紹介がまだだったね。

私、美宮響子と書きうつくしのみやきょうこと読む。

そして、小6です！！

チャームポイントは、腰までのびた長い髪。いつもは、ポニーテールでまとめてる。身長は、150？ほどで・・・顔は中の上ぐらい（と、思っている・・・）スタイルは、いいよ！！（と、思っている・・・）

ここからが、注目してほしいんだけど・・・私、天皇の孫なの！！だから、彼氏の内親王なのか？って質問の答えは、イエス、だ。

あ・・・内親王ってわからないか・・・内親王ってのは天皇の親族ってことだ。ほら、私孫だから・・・！！！！

では、本編へどろどろぞ！！

<2>平凡への興味

私は、5年になるまで、ドラマという物を、一度を見たことないのだ！！

だからなんだ・・・！？って思ったかもしれないけど・・・5年の春に見たドラマがきっかけで・・・そのドラマというのは、「絆」という名で、恋愛ドラマなのだ！！そしてこんな恋したくしい！！ってことで・・・平凡ということに興味を、もったのだから！！

そして、私は、6年から、一般の小学校に通うことになった

<3>条件

私が、おかあ様に、一般の学校に、普通の市民の考え方を知るために通いたいと言ったら、

「いいわよ。た・だ・し、あのペンダントを付けることと、天皇の孫だということを隠すことと、期限は、1年間。お分かり？」

と、言われたため、

私は、1年しか、一般の学校に通えなかった。

それが、条件だ。

<4>出会い

ペンダントよし!! 髪型よし!! 服装よし!! 笑顔よし!!

ペンダントとは、天皇一家しか持っていない、いわば天皇一家の証なのだ!!

素敵な出会いのためにオシヤレしなきゃね~~~~

「いってきま~~~~す!!」

「いってらっしゃ~~~~いき~~~~こ様~~~~」

よっしゃあ!! いくぞお~~~~

タタタタタタタ

「あ~~~~」

ええっ!! いきなり運命の出会い~~~~こまっちゃ~~~~

その子は逆光で、顔は見えなかったけど、カッコよさ~~~~う!!

「道、こっちだよ？」

親切~~~~ってええ!! マジ!! 天皇の孫が方向音痴だなんてしられたくなく~~~~い!! イケメンだし~~~~

ここは、いっちょ逃げ~~~~る!!

ズダダダダダダダ

信じられないかもしれないけど~~~~コレが、彼と私のであいだった~~~~

<5>新しい教室、新しい出会い、そして再会

「はいっしずかに～～～転入生をご紹介します～～～す!!」
ざわわわ!!

私は、6年4組に入ってきた。

「美宮響子ちゃんで～～～～す。」
ペコリ。

う～～ん様ずけじゃないといまいち決まんないなあ～～

私は、学級委員長の近くということで、窓際の一番後ろだ。隣は山崎信吾といつてのほほ～～んとしている。それよりい～～道はさんで隣は、あの、朝のイケメンだったのだ!!じ～～としげしげとイケメンを見ていると、朝の時間が終わったようであつという間に、人が集まってきた。

「どこから来たの」

「好きなアイドルいる?」

なんてつまらない質問!!そんな人たちの中でも、後に友人になる人だっているんだ。

のちに友達、いえ、親友になる人を、3人紹介しよう。

一人、桜崎満理子。さくらざきまりこ、と読む。ここまでかっと言いたくなるほど下がった目、右目の目尻についた、キュートな泣きぼくろ、とってもカワイイ子だ。性格は、控えめ、おとなしめ。

二人、山本香菜。やまもとかな、と読む。特徴のないことが、特徴になっている子だ。つっても下がってもない目。カワイイと言えないこともない。。。。。

三人、椿花梨。つばきかりん、と読む。きつとつった目、ギュッとまがった眉毛。さすが学級委員長と言いたくなるような顔つきだ(実際学級委員長は、彼女だ。)せいかくは、きつ～～い!!

場面を戻そう。私は、みんなの質問を、軽～～くかわしていた。それよりも、新しい教室を、よく見たかったのだ。緑のカーテンに、木色の机、きれいだ。。。。

そして、その時の私は、あのイケメンとの再会を心から楽しんでた。。。。

<6>レサ~~~~チ

調べて分かったこと。

・名前、神山拓斗、こうやまたくとと、読む。

・身長、150?

・体重、34?

・好きなスポーツ、サッカーも、野球も、どれでも、ほとんど好き。

・好きな食べ物、フルーツ。

・嫌いな食べ物、野菜。

・けつえきがた、A型。

・誕生日、12月6日。(ちなみに、私は、3月29日)

・せいざ、いてざ。(ちなみに、私は、牡羊座)(これは、あいし
ようが、いい)

・好きなブランド、BLACKBAATO。(ブラックバアア
アアト、と読み、黒い鳥のデザインで、とても売れている。)

パターン!!

私は、手帳を閉じ、にひひっと笑った。上のは、私が、一週間で調
べ上げた、あのイケメン、いや、神山拓斗の、プロフィールだ!!
やっぱり、何にかかるとしても、データーを集めないことには、始
まらない。

私の、リサ~~~~チは、かんっぺきだああああっ!!

<7>ときめき

ドキッ今日はなんかいときめいたかな.....。

チラッ

男のくせに長いまつ毛。澄んだ瞳。誰にでも、優しい。優雅な身の
こなし。.....そんな神山拓斗は、モテモテだ。

休み時間になると、道挟んだ隣の私の席まで、女の子がおしよせて
くるほどだ.....。

「ねえ~~~~拓斗~~~~お?さっきのお~~P、22のお~

~~~~こたえおしえてえ~~~~。」

なんで、そんなに、おが多いのよ!!!! そんな女の私でも嫌がるよ  
うなこと、男の子ならなおさら嫌がり、全治、30分のけがを、負  
わせるだろう。なのに拓斗は、口角をきゅっと上げ、目をすっと細  
めると、

「いいよ。」

ドキドキドキドキドキドキドキ!!!!!!

殺すきかっ!!!!!! ってくらいときめく。みんなそうなりたくて、集  
まるんだ。けど私は、ムリ。だって、だって、だってえ!! はずい  
んだもん!! ほかのみんなは、ずいぶん前からべたついてるから、  
拓斗だって慣れてるだろう・・・けど私は・・・一回もべ  
たついたことないからっ!!!!!! ムリっ!! そりゃあ~~~~みんなだ  
ってその一回を、踏み切ってきたんだろうけど・・・。私は、じ  
~~~~と、ただじ~~~~と彼を見つめていたらいいな・  
・・・そして、ずっとときめいていたら・・・と、思
ってる。

<8>お友達

・・・くそっ拓斗のことしか見てなくて友達つくんのわすれてた
ああああ!!

今宵、転入から、3週間目、友達・・・ゼロ・・・ヤバ!!
ああ・・・ど~~~~しよ。

1人で沈んでいたら、声を、かけてくれた人がいた。

「きよっ響子ちゃん!!」

「ほえっ？」

「あっあっあのっ・・・一緒に図書室行ってくんない??？」

「へ？」

「あのっだからっ図書室にい・・・」

「いや・・・だから、な・ん・で・わ・た・し・な・の・か・って
聞いてんのよ!!」

「いつ今本読んでいるのは、あなただけだから……」
クルッ

なるほど……私は、拓斗を、より自然に見つめるため、ハリー・マジックという本を手に、拓斗を見ていたのだ。あれ……そういえば……この子どもで見たことあるような……。ああそうだ、拓斗の、お隣の子だ。いいな。席こうたいしてほしい……うーん。そうだな……まあひまだったし。いいか。

「いーよ」

「ほんとっ!!」

「うん」

うしししっ お友達になれそ……うーん!!

くなんと、その少女こそ、のちの親友、桜崎 満理子だった。く

<9>図書室!!

図書室の場所は、学級委員長の、椿花梨から、聞いていたから、知っていた。本は、100冊を、越えている……。とか何と言ってたな……。ってか私の家には、100000冊以上は余裕にあるぞ。

「満理子、あんたはどんな本読むの？」

「えっ？」

ふり向いた満理子が持っていたのは、「ミステリー列車」「ミステリーの館」……ってミステリーマニアかしら……。

「ミステリー好きなの？」

「うん！」

満理子は、恥ずかしそうに、けど、うれしくもあるような顔でうなずいた。カワイイ……。悔しいけど、満理子と、拓斗って似てるな。美しくて、かわいくて、優しくて……。くそお……

「ねえ満理子。明日も来ようね。」

「うん。」

私は、ハリー・マジックの2巻を取って、ミステリー関係を3冊持

っている満理子のところへ行った。
いつか満理子みたいにかわいく、拓斗に、似合う女の子になろうと。
・・なろうと、思ってた。

<10>キラード

「響子さん!! すいませんっ」

このしゃべり方は・・・・委員長!?

「1つ案内してないところがありました・・・ってことでいきませんか?」

今宵は、3週間と1日目。

約束していた満理子は、休み。それで一人で、ボーとしていたら、委員長に声かけられたのだ。

まっいいか。拓斗は、どっか遊びに行っていないし。

「はい。行きましょーか。」

「・・・・はい・・・・。」

委員長、自分から言い始めたくせに元気ないなあ・・・・
タタタタタタタタ

委員長が小走りでいくので私も、必然的に早くなった。いつもなら、委員長は、「走っちゃいけません!!」って一喝してんのに・・・・
・珍しいな。

「はあっはあっここです・・・はあはあ・・・・。」
もう息切れしてるし・・・・かよわいなあ。

「ここは、授業参観の時などに車などを止めておく場所です。」

「あとここは、通り抜けるので、道としても使えます。ちなみに奥に、ベンチもありますよ。」

ベンチ・・・・か、ハリー・マジックをゆっくり、満理子と一緒に読めるな。妙に、人もいないし。

「けど、ここは、通らない方がいいですよ。」

「ええっ!! なんで?」

「ここは、別名、キラードって呼ばれてるんですよ。」

「きらあろうどお??」

「ええ。死人が出たの。」

「ふーん。」

「怖くないの?」

「こわくない。こわくないわ。」

スタタタタタタ

本読む、絶頂の場所だもの。いとおひとり死んだぐらいで、手放せるもんかっちゅうねんっ!

く今から思えば、いかなかった方が良かったのかもしれない・・・
・だって、聞かなくていいこと、見なくていいことに触れてしまっ
たんだから・・・く

<11>まじかよ・・・

いいとこだ・・・

整備された道は、歩きやすくて、楽しい。

桜は、ほんのりピンクだけど、緑もまじっててきれいだ。

そして、噂のベンチには、人影。・・・人影!? ふーんやっぱり
委員長みたいに噂におどらされてる人ばかりじゃないんだね。どん
な人かな? ちよっともくせないサラサラの髪、優雅な身のこなし、
スタイル抜群の体。近づくともっといろいろ分かってくる、男のく
せに、長いまつ毛、澄んだ瞳・・・。

神山拓斗!!

「・・・モ・・・ルイ・・・キ・・・チ・・・ワ・・・」

うん? なにか聞こえてくるぞ?

近づくともっと聞こえてきた。

「気持ち悪い・・・・・・気持ち悪い・・・・」

へ?

そういえば・・・拓斗は、ブルブル震えている。気分が悪いのか
な?

「ああ・・・マジ気持ちわりい・・・」

・・・あれ・・・？

「ブスのくせにべたべたさわんじゃねえよおマジで。」
苦し紛れに出た言葉は、

「まじかよ・・・。」

だけだった・・・。

私は、拓斗が、下品なことに、すつごくショックを受けた。だってあ・の・拓斗がブスっていうなんて！！普通は、思わないじゃない！！
というわけだ・・・。

春（後書き）

まだまだ未熟者ですが・・・よろしくお願いします!!

夏 上（前書き）

夏へんは、2巻ありますが・・・よろしく願いします！！

夏 上

<1>プロローグ

雨。雨。雨。どしゃぶりの雨。

の中、傘もささず、立ち尽くす女の子がいた。

女の子は、ゆっくり口を開く。

「キョウコチャンメ、キョウコチャンメ、ベタベタシヤガッテ・
・・カレハ・・・・カレハ・・・・ワタシノ・・・・ワタシの
・・カレシナノニ!!」

女の子の声は、むなくも雨の音でかき消される・
お気に入りのワンピースは、濡れに濡れて、体に引っ付いている・
・・。

「カレシナノニ・
・・。」

女の子は気にせずつぶやく・
・・。

女の子の顔は、雨に濡れて、泣いているのかどうかわからない・
・。

女の子は、ふっと微笑む・
・・。

そして・
・・。

「ソウダ・
・・。」

「キョウコチャン・
・・ガラガラガラガラ!!」

話した瞬間に、雷鳴が鳴り響く。

けど女の子は、気にしない・
・・・気にしない・
・・・キ・ニ・
シ・ナ・イ・
・・。

これは、響子の知らない、ずっと、後のこと・
・・。

<2>やっぱ、サイコ

「まじかよ・
・・。」

を、言ったのが悪かった・
・・。

「だれだっ!!」

という具合に見つかったのだ……。

私は、物陰から姿を見せず、消え入るような声で、答えた。

「美宮……響子です……アッあの……同じクラスの……」

「あああの……方向音痴。」

何たる無礼!!

そして、私は、怒りに身を任せて、物陰から飛び出した。

「なんですってえ!! 大体あの道は、分かりにくいのよ!! 大体そんな覚え方は、紳士とは、言えないわっ!!」

と、まくしたてた。

すると拓斗は、ぽかん……といった表情をした。そして、ぷつとふきだした。

「あはははははははっ!! 俺に話しかけたくて、うじうじしてるやつもいるのになあ……」

お前は、初めて俺としゃべった第一声は、なんですってえ!! だもんなあ」

私は、すっかり忘れてたのだ……!!

しゃべっている人が、自分の好きな人だったということ……そんな私にはきずかず、拓斗は、上機嫌で話し始めた。

「ほんとお前は、面白いなあ!! あっそういえば、ここ怖くないのかあ?」

「ああ一人、死んだから?」

「いや? 二人だぞ。」

「え……」

そういえば!! 委員長は、人が死んだ、としか言っていない……じゃあひとつこ一人、じゃなくて、ひとつこ二人か……。ちよつとこわ……。くないっ!!

「特に、この、ベンチに、」

怖がってる私をよそに、拓斗は、べらべらしゃべりたてる。

「だって死んだ二人は、二人ともこのベンチ近くのこの桜の木で死

んだんだんだから。」

私は、びくつとして、すごい勢いで立ち上がった。

「なーんだ、強い子ってわけじゃないんだ。」

拓斗が、からかうように言ったので、意地を、みせたる!!と、思
ってすつと座った。すると拓斗は、

「くっくくくくくくふふふっ!!」

と、押し殺すように、笑った。

「あ、で、結局どうして、ここに来たの？」

うっうう…あんな澄んだ瞳で見つめられると、私が天皇の孫という
ことまで言っちゃいそうだ…。

「たっただ、満理子に、ここは、本が静かに読めそうだから、教え
てあげよう…と、おっもって…。」

「満理子お？」

拓斗は、ふがいそうに、睨みつけてきた。

「お前は、満理子と、友達なのか？」

「そっそうだけど…。」

すると拓斗は、もっと顔を、こわばらせた。そして、

「じゃあ。もう昼休み終わるから。」

と、立ち上がった。

つてえ!! いやいや!! 理解できないし!!

「待ってよっ!! どうして私と満理子が、仲良しだと、あなたが不
機嫌になるのよっ!!」

「確かに…悪かった。あのなあ…満理子だけなんだ
よ、俺に落ちないの。」

「落ちるう？」

「好きにならないってことだよ。」

「ああお前も入れたら、二人だな。その二人が組んだんだ、不機嫌
になるのもわかるだろ？」

「じゃあ他の人は、全員あなたのことが好きなの？」

「おう。」

「え・・・」

ライブルおお!!やばっ!!

「ってかさあ、そんなのどうでもいいんだけどね。」

どうでもいいって・・・すっげえきになるんだけど・・・。

「それよりも、BURAGレイ（ブラグレイ）物語って知ってる？」

「ごめ・・・知らない・・・」

くっそお!!そんなのあったけ?

「だよなあ。男もんだしBLCKBAAAAATO物語と、グレイの冒険の、コラボなんだ!!」

「え?BLCKAAAAATOって服のメーカーじゃなかった？」

「ん・・・けど、ゲームも出てるんだ。」

「へえじゃあお兄ちゃんが持ってるかも。聞いてみるね。」

「にーちゃんいたの!？」

へへへっいいいけど、買うことはできるから、これをつかわせてもらうぜ!!

「うん？」

キーンコンカーンコン

「あ、じゃあ。ばいばい。」

「あ・・・うん・・・」

やっぱりいゝゝ拓斗さいっこう!!ホントやっぱサイコゝ

<3>オマケゝ小さい、小さい、小さい、時の、小さい、小さい、小さい恋ゝ

勉強は、嫌いではない。

サラサラ。

むしろ、好きだ。

どぼどぼ・・・。

今は、高校と、中学に出てくる、詩、200を、暗記中だ。
もきゅっ。もきゅっ。

だから休みなんていない。

サラサラ。

だから、いま泥団子を、作っているのは、自主的ではない。
ふわっ。わふっ。

できた……。

が、おもしろくない。

この話は、私が上のように、やくざれていた、4歳の時の話だ。

私は、できた泥団子を、そっと、置く。

そしてあたりを見渡す。

いるのは、15人程度の私の、おもり役と、一人の男の子だ。

みんな、私と、15人が入ってきたら、すごすごと、出て行った。
だから、外はキライ。

自分が特別だって思い知らされるから。

私は、男の子に声をかける。

「あなたは、出て行かないの？」

「だって、泥団子が、できてないし。」

その男の子は、長いまつ毛にパツチリまつ毛が、印象的な、かつこ
いい男の子だった。

けど男の子の、持っている泥団子は、水の配分を間違えたのか、べ
ちよべちよだし、枯葉などが、飛び出ている。

「泥団子の、本読まなかったの？」

「うん。よまなかったよ。」

ウソ！！私は、200冊も泥団子の本を読んだのに！！

「じゃあ、泥団子が何か分かったの？」

「うん。」

「たった4歳児なのに！！」

「君だって4歳児でしょ。」

あ……。

ノックアウトだ。

そうだ、私は、天狗になっていたのだ。

たった4歳児、だなんて馬鹿にしていたんだ。

「ねえ。お名前なあに。」

「つ……」

美宮響子内親王様、と言おうとして、口を、閉ざした。

ここでは、普通の子になりたかったのだ。

「響子。響ちゃんよ。」

「ぼくはね。たっくんだよ。」

「たっくん、明日遊べる？」

「うん!!」

く今思えば、これが私の初恋だった。く

<4>新しい友達

「だめよ!! 響子ちゃんが、嫌がるわよ!!」

ふわっとしたスカートと、たれ目がかわいい、満理子が山本香菜に、言う。

「大丈夫。」

そしてここに、到着して、一言。

「私も、ハリー・マジックの、ファンなの!!」

「まじで!!」

聞いた!?

やったよ!! ハリマジ（ハリー・マジックの、略）の、ファンだつてさ!!

え?

なんでこんなに喜んでるのかって?

だって、例えば、その本と同じ名前の子が、教科書に出ていたとしたら、（まあハリーの場合難しいだろうが、）同じファンの子がいれば、その子と盛り上がるけど、いなかったら、心の中で、1人さみしく盛り上がることになるからだ!! そんなのまっぴらだろう

!?

私たちは、時間のことを忘れて、話し込んだ。時々満理子のこと話
うかがうんだけど、満理子は、ニコニコしながら私たちの、話を聞
いていた。・・・いい子だ。

そんな時、私たちに話しかけてくる人がいた。

「あなたたち!! 盛り上がるのは、大いに結構ですけど、盛り上が
るなら他でやってくださらない?」

上から言われるのに、慣れていない私は、この子のいい方にカチン
ときた。

「なんですって!! だああ????」

「ごめん、響子ちゃん。」

ええっと・・・わかりにくくってごめんね。

「ごめん響子ちゃん」は、満理子の、セリフ。

で、「だああ???」は、満理子に、不意に、引っ張られて、「
だいたいあなたはねえ!!」と言おうとした、「だ」の後の悲劇の
ために起こった、ちよつとした手違いだ。

場面を戻すと、

「はあ!!」

と私が叫ぶと、同時に、満理子が、興奮しきった声で、言った。

「ねえ!! それ、「ぼくらは、ミステリーを愛す。」シリーズの「
ミステリー新聞社」でしょう!! 私も読んだわ!!」

「え!? ホントに!? これ読んだの!?」

「うん!!」

そうなのだ!!

私たち、4人は、1日の間に、ナカマを、見つけてしまったのだ!!
そして、同時に、私には、1日の間に、3人ものお友達ができたの
だ!!

<5>お願い

「お願いします!! お父様!! BURAGレイの、カセット買って

ください!!」

「あのな、国民が、せっせと、せっせと、ためた、金を、カッセツトなんかで、使うのは、おかしくないか？」

たしかに。けど、そんなんで、引き下がるほど、拓斗えの愛は、浅くない!!」

「」が、多くて、イライラしていたあたしは、いつそう大きな声で言った。

「お年玉の、前借!!」

「よし、何円だ？」

「知りませんが!! 2万を超すと、思います!!」

「はいよ。」

ひらっ。万札が、二枚ひらひらっと落ちてきた。

がしっ!!

やったぜっ!!

拓斗への愛は、海より深い!!

く実際、BURAグレイは、4200円でした……。

く6>なぜ？

なぜ？

「なぜ……。」

今、私は、ベンチ（あの、キラードの。）のそばに立ってる。1人で。

私は、学級委員長会議で、出れない、花梨を置いて、そこへ、3人で来た。はずだった……。

のだが……。

拓斗が、いた。

私は、BURAグレイを買ったということを、言おうとした、けど、拓斗の方が早かった。

『満理子……!!』っていったんだ、香菜だって、私だってい

た!!　　けど、拓斗が呼んだのは、満理子だった……!! 満理子だった……

拓斗は、悲しそうな、ぼつが悪そうな、そしていて、すぐるような、顔を、していた。

けど、満理子は、悲しいという気持ちが、顔に、あふれ出ていた。

『香菜……よろしく……』と言って、満理子は、走り去ってしまった。

『満理子!!』と、言って、拓斗は、走って行った、

『響子ちゃん……5月の、末、席替えが、あるから、その時、すべて、分かるから……分かるから……だから、ごめん!!』と言って、香菜も、走り去ってしまった、

けど、5月の末の、席替えは、あさってだけ……。

なぜ? なぜ? なぜ? なぜ?

私は、分からない……分からない!! ワ・カ・ラ・ナ・イ……
……分からないよう……

<7>5月末、席替え。

今日は、あの、席替えの日、何がわかるんだろう……満理子と、拓斗の、関係?

「よし!! じゃあ、席替えするぞお!!」

「わあわあ」

「拓斗の、道挟んで、隣は、私よっ!!」

「何言ってるのよ!! ブス!! 同じ班の方が、イイに、決まってるじゃあない!!」

あれえ? なんで、みんなは、『隣』を、狙わないんだろう?

「ほらっ! 満理子、来なさい。」

は?

私は、前の席の、花梨に、そっと話しかけた。

「なんで満理子が、前に出んの?」

「あ……。」

花梨が、気まずそうに、私を、見て、説明し始めた。

「あのね、このクラスはね。ほぼ、くじ引きなの。」

花梨は、『ほぼ』を、協調して、言った。

「だけど、例外がある。」

花梨は、『ほぼ』より、ずっと、強く、『例外』と、言った。花梨がこんなに気持ちを込めるなんて!!

「それが、満理子と、拓斗だよ。」

「は？」

「・・・あの、人達を、見て。」

花梨は、拓斗の、『ヨコ』以外を、狙っている、過激派を、指差した。

「あいつらがどうしたの？」

「あいつらが、拓斗の横に、座ったら、どうなると思う？」

「喜ぶんじゃない？」

花梨は、出来の悪い教え子に、教えるように、ゆっくり、ゆっくり、言った。

「喜ぶだけで、すむと、思う？」

「え・・・!!」

「まあ、最初のうちは、そっと手を、つなぐだけだったのに・・・ね。」

「え!! 手を!!」

「そう。だけど、それだけでも、あの子たちは、怒って、授業中なのに、大乱闘。」

「大・・・!!」

「それで、満理子が、ずっと、横になったの。」

「とんだね。」

「そう？」

「なんで、満理子になったの？」

花梨は、目を細めて、悲しそうに、首を、すくめながら、言った。

「満理子から聞いたよ。満理子が、今日、全部、響子ちゃんに、言

うって。」

「うん。」

「満理子から、聞いた方が、いいでしょう。」

「うん……」

私と、花梨が話している間に、満理子は、くじを、ひいていたように、みんな、満理子を見ていた。そりゃあ、そうだ。大好きな、拓斗の席も、いっしょに、決まるんだから。

満理子は、窓際の、そう、私の席を、引いた。

まあ。だから、どうってことも、ないんだけどねえ。

じゃあ、拓斗は、信吾の、どこか。

巡り巡って、私の番に、なった。香菜は、なんと！！拓斗の、道挟んで隣だった！！花梨は遠くなった。すっ。

引いたのは、32番だった！！

え？だからなんだって？

満理子は、33番を、引いたんだ！！

だから！！

拓斗と、同じ班に、なれたんだ！！

やった！！

<8>とうとう……満理子の秘密が……。

ガタガタガタ！！

いっせいに、みんなが、机を、動かし始める。

「くそお……あの、転校生……2連続だぜ……せこ……

絶対ずるしてるよ。」

う……視線が、怖い……。

香菜が、明るく、話しかけてくる。

「気にしないでねえ……いっつも、そうだからさあ……それにしても顔が、ほころんでるぜえい！！拓斗と、同じ班うれしいんだろう！！」

うつもう!! 茶化しちゃって!! そりゃあ嬉しいけど……。

「うんなことないっ!! 私、満理子と、香菜と、近くなったのが、嬉しいの!!」

「ふうん。」

ちらっ。

満理子を見てもうかかない顔を、している……。

そして、昼休み。

「で？」

「あのっあのっ!!」

満理子は、うつむいて、ずっと、あのあの言ってる。

私は、そこに、イラッと、してきて、しまった。分かったはずなのに……満理子が、話すことを、すっごくがんばっていたことを……。

「早く!! 言うなら言ってよ!!」
やってしまった!!

満理子は、顔を、くしゃくしゃに、して、泣いた。泣いて、しまった。

「あ……ごめ……。」

言っただけ、遅かった。
だっ!!

満理子は、走り去ってしまった……。しまった。

秘密は、分からずじまい……。

<9>仲良し? キレツ……

次の日、満理子は、休んだ。

私のせいかな……。

気が、めいていたので、あの、ベンチに行った。
うしたら、拓斗が、いた。

そして、私は、すぐに、あのことを、言った。

「あのね。拓斗、私ね、BURAグレイ買ったの!!」

「まじで!!」

「まじまじ!!」

うーんやっぱり、くいついた。

「どこまで行った!? 俺はね!! 博士との、戦いまで行ったんだけどね。」

「ほんと? 私は、買ったばかりだから……。グレイとの、出会いまでしか、言っていない!!」

私たちは、そのゲームを、持っていないとわからないような、専門用語ばかり、使って、話し込んだ。

私たちの、仲は、グツと、ちじまった。よく、ベンチに、言って、ゲームの、話を、しまくった。

拓斗は、私の前では、本性を、表わす。それが、もっと、仲を、ちじめた。

そして、とうとう、私は、7月20日、夏休みが、始まる1日前、拓斗の家で、通信することを、約束した。

一変して。

満理子とは、口を、利かなくなった。

キレツは、深まる……。深まる……。

<10>そんな……。

とうとうよ!!

とうとうなのよ!!

拓斗の、家に、行く日が来たー!!

うふふふっ!! オシャレしなきゃ!!

けど、今日は、墨を、ぶちまけたような、曇天。昨日なんて、雷が、なっていた。

折り畳み傘を、持ってと。

てってけてってけてってけビシャッ!!

最後には、水たまりに、はまったが、気にしない。だって、気分が
いいんだもん!!

「・・・か!!」

「ま・・・ん・・・で・・・の!？」

「・・・どい・・・わ・・・が・・・か・・・う・・・す・・・
き!!」

ん?とぎれとぎれに、声が、聞こえてくる。
だれだろう?

「わ・・・すき・・・ないの?」

「そん・・・ないよ!!」

近づくごとに、聞き取りやすくなっていく。

あれ?この声・・・どこかで・・・?

「好きだよ!!満理子!!」

あ・・・。ああ・・・。あ・・・。ああ!!

そこには、「好きだよ!!満理子!!」の時、抱き合った、拓斗と、
満理子が、いた。

「本当う?拓斗・・・。」

「うん・・・。大好きだ。」

痛い・・・。逃げ出したい。ここに、いたくない。ううう・・・。
。かなしい・・・。

二人は、見つめあう・・・。

二人の顔が、どんどん近づいていく。

そして二人はキ・・・。

夏 下（前書き）

今回も、長いですが、『もう飽きた!! 長いし!!』とか言わないで、読んでください!! よろしくお願いします!!

夏下

<1>プロローグ

もう疲れた。

彼の心は、完全に、奪われた。

私は、何度も、紙を、見る。

別れ話の、筋書きだ。

「大好き……拓斗……。」

こぼれた言葉は、台本とは、真逆だ。

「こんなに好きなのに……。」

涙が、止どめなく流れた。

もう、つきあってられないのは、分かってる。

分かっているんだけど……。

やっぱり好きだ……!!

(これは、満理子の、話です。)

<2>私は、臆病だ。

ス……した……。。

した。した。した。し・た!!

キスした。

私は、きずいたら、走り出していた。

やばい!!

拓斗と、約束してたのに。あんなときに、飛び出していけないよ!!

あたしは、臆病だ!!

だめだ!!

私は、億病なんだ!!

そりゃあ。拓斗と、友達どまりさ。満理子には、勝てないさ……。

。

<3>仲直り……した……。

「ごめん!!」

え?

今、目の前には、満理子が、いる。

そして、頭を下げている。

えと……なんで? キ……キスしたからか? キャツ?

「ほんと、ごめん!! あの時逃げちゃって。」

あ!! キスシーンで、完全に、忘れてたけど、そーやーそんなことあったかな。

「いやっ!! いいんだよ。別に、こっちが悪いんだから。」

ホント、いい子だなあ。だってわざわざ家まで来てくれるんだからねえ。

「で、何言いたかったの?」

「あの……。私は、いやっ、私と、拓斗は……。実は……あの……。いやあ、あのお、うえっとおつつつつつつつつ……つきあってるんだよ……。うん。だよ。」

「へえ。」

「え? 驚かないの? 怒らないの?」

いや、だって、キスしてたしねえ。つきあってたるのなんて、分かりやすいっていうか……。なんて言えないしね……。

「あ!! いや!! ほら!! 声も出ないほど、驚くってあるじゃん!! ほら!! あれ!!」

「怒らなかった?」

「え? なんで?」

「だって……。隠してたし、言ったらみんな、すっごい泣くか、すっごい怒るかだし……。」

「ああ。まあちょっと悲しかったかなあ。」

「でしょ……。だから……。ちょっといいずらくて……。

隠しててごめんね？」

「いやいいよ？え？で、どこまで進んでんのさ！！た・く・と・と・と？」

うーむちよつと攻めていくか。

「キスしたあ？」

「いやっ！そんなの……。」

うーむ、はぐらかすかあ。

「ほんとお。」

「うん。ぜんぜん。」

やっぱり、言わないかあ。

「あっあのさあ。仲直り祝いに、プール行かない？」

「いいよ！！プールかあ！楽しみだなあ。」

あれ？そういえばはお父さんが、水のあるところは最低でも20人
お守り役つけろとか言ってたよーな。

波乱の予感……。

<4>お・ま・けくおかあさんの夫は、一般人！？

私の、婚約者は、はりうでえつとまんり、君です。（ハリウデット
万里）

ハーフです。

イギリス人と、韓国人の、ハーフだ。

みんなは、ハーフというと、どんなイメージがあるだろうか？

金髪で、あっ外国人だっ！！と思いきや、ふり向いた、目の色は、
黒。容姿端麗。……。

これぞ、ハーフって感じじゃないですか？

けれど、私の、婚約者は、そんな人じゃないです。

黒髪で、え？日本人？と思いきや、ふり向いた眼の色は、黒。あ・
・・やっぱり、日本人か・・・。鼻ぺちゃ。あれ？イギリス人

の、要素は？まあ。性格は、ほんのりイギリス人だ。

はりうでえつとまんりは、すっごいお金持ちの、子供です。

この結婚は、日本にとって、すごい得で、活性化に、繋がると、言われて、おります。

けど、私には、好きな人がいます。

それは、今の、夫です。

私は、その、はりうでえっとまんりをふって、日本を、不況に陥れながらも、今の夫を、愛しつづけて、とうとう、あの、堅物たちを、（親）納得させて、結婚しました。

だから、私は、響子にも、へんてこな、ハーフなんかとじゃなくて、一般人と結婚させたかったので、学校に行くのを、OKしました。この判断が、日本を、大不況に追い込んだとしても、興味ありません。

だって、どんな母親でも、娘に、愛のない結婚なんか、してほしくないもん。

ネ？

<5>み・ず・ぎ・選び？

ビキニ・・・。

引かれるだろうからなあ・・・。

スクール水着・・・。

これは、ビキニよりも引かれるだろうなあ。

じゃあやつぱり、あの、服っぽい、水着かあ。

あれは、つまないんやケロ・・・。

まあいつか。

ふふ？

たーのしみ、？

<6>プール・・・会わない方が、ずっと良かった・・・あんなことになるなら！！

服っぽい水着の下に、ペンダントを入れ、ちょっと、おしゃれをすると、準備完了っ！！

「満（り）理（り）子（こ）っ！！」

「あ！！響子ちゃん！！！」

「じゃ、いこっか。」

私は、家の近い、満理子と二人で、市民プールで、香菜と、花梨と、待ち合わせしている。

お守りの件は、キッチンと、20人のお守りは、ついている。だから、普通より、人が多いが、まあきにしないでおくれ。

「すくうるみいずぎい！？」

あ！！香菜の声だ。

「ええ。違うんですか？」

委員長・・・うふふいっつも変わんないなあ。プールなのに、硬いんだから！！

「あ！！満理子！！響子！！！」

香菜が、私たちに、きずいて、手を振った。

「香菜！！花梨も、お久しぶり！！！」

私は、明るく、手を振った。

二人は、満理子と、私が、ピリピリしてんじゃないかと思ったみたいで、ほっとした。

私たちは、4人並んで、プールに入った。

「あ！！拓斗！！！」

満理子が、明るい声を、あげる。

あ・・・。

会うべきではなかった。私は、満理子とのキスを見て、逃げ出した時から、拓斗と、あってないんだ。

きまずい。

そんな気持ちに包まれてたから。

私は、きずかなかったんだ。

満理子の、異変に。

<7>お・ま・け〱響子ちゃんが、聞いちゃった、セリフの、す・べ・て？〱

「ばか!!」

「満理子なんでいるの!？」

「ひどい、私がいらないからって浮気するき!!」

「私のこと・・・好きじゃないの？」

「そんなことないよ!!」

「好きだよ!! 満理子!!」

「本当う？ 拓斗・・・」

「うん・・・大好きだ・・・」

でした!!

夏 上で、あてはめてみてね!!

<8>満理子の、異変

「満理子!!」

拓斗は、本当に、びっくり!! って感じで、満理子を見ていた。

信吾（前、私の横だったやつ。覚えてない人は、春を見てね。）たちと来ていた。

「拓斗。」

満理子は、あんまり驚いてないようだ。

私は、ずっと、（拓斗、こっちを見るなよお見るなよお）って思ってたから、満理子が、1オクターブ高い声で、拓斗と、話していることに、きずかなかった。

そんな時、香菜と、花梨が、近寄ってきた。

「ねえ響子ちゃん。今日の真理子さぁおかしくない？」
え？

その時、私は、きずいた。

シャベリスギダ。オカシイ。コエガ、タカスギル。カノジヨハ、ハシャギスギテイル。

「おかしい。確かに。」

「あー！分かった、拓斗と、いるからかあ。」

「違うよ」

「へ？」

委員長の、言い方は、きつくて、意志の強さが、伝わってくる。

「彼女は、拓斗といるときは、いや、拓斗がいて、私たちもいるときは、こっちもうかがって、『私が、離れることによってこっちが、嫌がってるのではないか？』という、視線を、投げてくるの。」

「そういえば、そうねえ。満理子は、どっちも大切って感じだもんねえ？」

香菜が、楽しそうに、言う。

まるで、今の状況、そうこの修羅場を、楽しんでいるようだ！！

「まるで、まるで、今の真理子は、満理子であって、違う化け物のようだよ……。それに、まるで、拓斗との、最後の時を、楽しんでいるみたい……。！！」

香菜と打って変わって、花梨は、この状況を、重く受け止めてるようだ。

その重い口調で分かったのか、花梨も、気を引き締めて、つぶやく。

「まるで、私たちが見えてないようだわ……。！！」

「そんなー！！」

私は、急いで、口をはさんだ。

「そんなはずはないわー！！だって、学校では、私たちを、最優先してくれてるじゃない！！」

ぴきっ

二人の顔が、こわばった。

二人は、アイコンタクトを、繰り返し、花梨が、切り出した。

<9>学校の、掟……………

「拓斗は、3年の時に、ここに引っ越してきたわ。」

「知ってた？」

私は、花梨の質問に、静かに首を振った。声を出してはいけない気

がしたのだ。

すると、花梨の後を継ぐように、香菜が説明してきた。

「満理子は、4年の時に引っ越してきたの、知ってた？」

私は、また、首を振った。けど、それと何の関係があるのかしら？
それから二人は、交互に話し始めた。

「もちろん拓斗は、満理子が引っ越してくる前から、モテモテだったわ。」

「だけど、満理子が引っ越してきたことで、ある事件が起こったの
！！」

「もともと、二人は、引っ越す前のとこで仲良しだったらしいのよ。
」

「だから、女の子たちは、かわいくて、ちっちゃいころの拓斗を知っている満理子を、ねたんだのよ！！」

「けど、女の子たちの、恐ろしい逆襲劇を待たずに、二人は、つきあいだしたのよ。」

そこで、二人は、私を見て、同時に行った。

「ここで、お・き・てが、作られたのよ。」

「掟？」

私は、ここで、初めて、口を出した。

「そう。掟。」

重々しく、花梨が口にする。

香菜は、困ったように、そして、いやそうに、口を開いた。

「これは、噂だからね。信じ切らないでよね。」

二人は、また、交互に喋っていく。

「彼女たちは、賢かったわ。」

「そして、ずる賢かったの。」

「まず、彼女たちは、満理子を、見るにも無残な姿にして、拓斗の前に、つきだした。」

「ほら、拓斗あの性格だから、好きな人の、姿を見て、傷ついたのよね。・・・そして、自分を、攻めた。『自分のせいだ・・・』」

』って。」

「彼女たちは、そこに付け込んだのよ。」

「そして、満理子と、学校で、しゃべらなかったら、満理子の命は、保証してやる・・・と、拓斗との、掟を、作った。」

「次は、満理子よ。」

「彼女たちは、満理子の中で、半分以上も、でている「良心」を、利用したのよ。」

「満理子の前で、拓斗と、別れて!!と泣きついたの、何人も、何人も使ってね・・・!!!」

「良心の塊である、満理子は、親友だと思ってた子たちからも、泣きつかれ、別れは、しなかったけど、学校では、拓斗としゃべらない、親友たちが、悲しまないように・・・。という掟を作ったのよ!!賢いわ・・・ほんとに!!」

そこまで言われて、やっとわかった!!

掟の内容は、「拓斗と、満理子は、学校内では、しゃべらない。」なのね!!

だから、ベタベタしても、満理子は、口を出せない・・・ほんとよく考えたもんだわ!!

「今でも、間に受けてる満理子は、学校外でも、友達のことを、考えちゃうのよ・・・かわいそうに。」

「そして、もう一つ。掟があるのよ。」

「え!!」

私は、驚いて、二人を見上げた（二人の方が、身長は、高いのよ!!）

「前にもちよつと話したけど、ほら、ずっと、満理子は、拓斗の横って話。」

「あれも!!掟なの!?!」

「うん・・・。」

花梨が力なく答えて、香菜を見て、

「ごめん!!ひと泳ぎしてくるねえっ!!」

と、走り出して行った・・・っておい!!

「まあ、これは、花梨も関わってるもんねえ。」
え？

聞こうとしたけど、花梨は、間髪入れずに、話し始めた。

「ほら、満理子と拓斗は、しゃべれないじゃん。しかも満理子は、良心から、ベタベタすることもできないのよお、だから、二人を、横にしたら、騒ぎが起きないんじゃないか？って先生が、考えたのよ。」

香菜は、そこで、一息ついた。とても、いいずらそうに、渋々、また、話始める。

「けど、大ブーイング、当たり前よねえ、苦勞して、話したのに、また横にされたらたまらないもの。」

そこで、香菜は、言いにくそうに、泳いでいる、花梨を、ちらっと見て、あきらめたように話し始めた。

「ここで、花梨がかかわってくるんだけど・・・」

そこで、また、香菜は、花梨を見た。そして、

「そこで・・・過激派は、一番拓斗に興味のなさそうな、お堅い、委員長を、推薦したのよ・・・」

「先生も、花梨のことを、信用していたから、一カ月、そうしてみよう。という話になった。」

私は、花梨のことを、そつと盗み見た、確かに、恋愛に興味があるようには、見えない。

「3日・・・4日・・・花梨は、5日目に、休んだ。」
ピクン。

私の肌が、硬直するのがわかった。

「視線に耐えきれなかったのよ、先生の期待の目と、過激派の、さすような、視線に・・・!!」

「そこで、満理子が、登場するのよ。なんと、花梨の家にお見舞いに、行ったのよ!!」

香菜は、間髪入れずに、話す。私のことなんて、忘れたみたいだ。

「そして、花梨に言ったの、『どんな方法でもいいから、拓斗に触れて!!』そして、あなたは、この視線から逃げ出すのよ……!!」ってね。」

「お人よしにも、程があるわ!!」

「今度は、満理子が、その視線を、浴びるというのに!!」
そのお人よしは、今や、拓斗以外見えない!! って顔をしてるってのにねえ……。

「そして掟がつくられたのよ、『満理子は、ずっと拓斗の横』っていう……お・き・てが。」

私の顔は、みるみる青ざめていった……。

<10>お誘い?

あ!!

起きてのことで、頭がいっぱいになって、拓斗に、あの日こなったこと、謝るの忘れてた!!

そこで、やっと、満理子から離れた、拓斗のどこに行く……。ペチャ。ピチヨ。ペタペタ。

水の滴る、プールサイドの足音は、なんだか気持ち悪い!!

「あのお拓斗……君……。」

呼び捨てするのが、心苦しかったので、あわてて君を付けた。
拓斗は、怒るかと思いきや、心配するような目で、聞いてきた。

「あの日……なんで来なかったの? 心配したよ……。」
ズキュン!!

あ……やっぱ好き……?

「ご……ごめんちよつと風邪ひいちゃってさ!! けど、伝える方法がなくてさあ!!」

あたしは、つとめて、明るい言い方で言った。

「そっか……そうだね、じゃあ、今度電話番号教えるね。」
ええ!!

まじで!!

嬉しすぎる・・・!!

「あー!! そうだ、じゃあ、今度・・・じゅう?・・・月ぐらいに、遊ぼう!!」

ま・・・ま・・・まじですかあ!!

ちょっと遠いけど!! (忘れないでね、今は、8月)

やった~~~~~!!!!!!

お・さ・そ・いだあ!!

<11> 影ってのは、きずいたら、後ろにいるんだよ・・・入道雲、拓斗の電話番号 (結局あの後もらったよ。) 真っ青な空、おいしいかき氷、スイカ・・・。

夏は、順調に、進んでいた・・・。

いや、進んでいると、思い込んでいた。

けど、きずいたら、影は、後ろにいた。

真っ青で、クッキリとした、空と同じように、

クッキリとした・・・影が・・・!!

<12> 別れ・・・。そしてチャンス・・・。

まったく・・・!!

変わらない!!

学校って物は!!

べちゃべちゃ、くちやくちや、アイドルの話、オシャレの話。

ったく!!

この中で、楽しめるのは、満理子、花梨、香菜がいるからだ!!

そして何より、拓斗がいるから!!

けど、その拓斗と、満理子がいない。

なんでだろ?

まあ拓斗が、遅いのはいつものことだけど!!

満理子は、いっつも私より早く来ているのに・・・。

キーコーンカーンコーン!!

けだるいチャイムが流れる。

・!! それにしても悪趣味だ。このチャイムというものは!
! 昔の学校は音楽が流れてたのに!!

それにしても、満理子が、遅い!! 拓斗だって、チャイム寸前には、
絶対来てた・・・。

「遅れてすいませーん」

「すません。」

満理子と、拓斗の声が、たてつづけに聞こえてきた。

満理子!! やっと来たのね!! 心配したのよ!! と声を出そうとし
てはっときずいた!!

この空気・・・!! 拓斗と、満理子が、来たことに、不満いっぱい
の感じた。

すると、満理子は、ひそつと拓斗に何か話した。

話した!! 話した!!・・・掟を、破った!!

そして、満理子は、拓斗と向き直った(この時の暴言を、わざわざ
話す必要が、あるか? そりゃ、ひどいんだぞ!!)

そつと満理子は、拓斗のほっぺに触れて(この時の暴言を・・・以下
略。)顔を近ずけた!! (この時・・・以下略。)

ドクン。

くう!!

ずいぶん前に味わった胸の締め付けが、やってきた!!

ああ!! ああ!! 気持ち悪い!!

そして、二人は、キスした。

うええ!! ぐふう!! あ・・・ああ!!

書いてみると、簡単だけど、私には、ひどく、つらく、感じた!!
まあ!!

当たり前では、あるけど!!

けど、満理子が、口にした言葉は、誰もが、考えてないことだった
!!

みんなは、キスした後の、言葉は、何を、言うだろうか!!

『愛してる』? 『好きよ。』? そんな齒の浮いた言葉が、浮かぶだろう!!

けど、満理子が口にした言葉は、そんな言葉を、いっせいに、吹き飛ばすような、きつい言葉だった!!

「私たち、別れよ。」

・・・これは、チャンス?

神がくれた・・・チャンス?・・・チャンス・・・なの?

夏 下（後書き）

この巻で、キスシーンを、二度も見てしまう響子ちゃんですが！！
秋ぐらいになったら、挽回の、チャンスあると・・・思います・・・
・！！

気長に待ってください！！

秋（前書き）

今回は、8000文字を、越えてしまいました！！
だけど、『うざっ』とか、言わないで、（あっ『ながっ』もネ）
辛抱強く、読んで、下さい！！

秋

<1>プロローグ

ちらりちらり。ひらりひらり。

落ち葉が落ちる。

秋は、別れの季節。

「縁起が、悪い。」

怒ったような声が、誰もいない道に、響き渡る。

「だれか・・・俺の心を・・・癒してくれえっ!!」

彼の声は、むなしくも、落ち葉の落ちる音で、かき消される。

「だれか・・・!! ああ!! 響子!! そうだ!! 彼女と、遊ぼう!!
! そうしたら、いえるさ!! 傷も!!」

(これは、拓斗です)

<2>拓斗の叫び

「何言ってるの、お前!!」

かれこれ、3分間もの間の、静寂を、破って話したのは、過激派の、リーダーだった!!

「その前に、掟を、破ったことに対して、罰してやるう!!」
くるっ

満理子は、ふり向いた。

けど、その顔は、まるで、別人のように、冷たかった。そして、冷ややかに、リーダーを見つめると、冷酷にも、

「ガイヤは、だまって。」

と、言った。リーダーは、それにビビって、口をつぐんだ。

満理子は、拓斗に向き直って、冷たく、もう一度、言った。

「私たち、別れよ。」

すると、ポカーンとしていた、拓斗が、反応した。

「なんで・・・。」

それは、絞り出すような、声だった。

そんな絞り出すような声に、同情しようともせず、満理子は、追い打ちを、かけた。

「あなたのこと、好きじゃなくなったのよ。」

さらに、満理子は、まくしあげた。

「それにあなたも、私のこと好きじゃないでしょ？それぐらいわかるわ。そして、私を、邪魔だと思ってるんでしょ。分かるのよ、一緒いたら。」

「そんなこと・・・ないっ！」

拓斗の声は、苦しそうに、詰まっている。

「ふうん。最後まで、本当のことを、言わないのね。まあいいわ。とりあえず、私は、もうあなたのことなんか、好きじゃないの。じやあね。」

そして、きびすを返して、静かに、教室を、でていった。

「あ・・・ああ。」

最初は、みんな誰の声かわからなかった。けど、それは、拓斗の声だった！！みんなは、びっくりして拓斗を見た。すると拓斗の顔には、「素」の顔が、あった。

「あ！！あああああ！！うあああああああああ！！」

みんなの動きは、2つに、わかれた。1つは、私や、香菜や、花梨で、ぼくを見ていて、行動に移そうとしない人たち。2つめは、先生（そのとき先生は、満理子を追って、はるか遠くに行っていた）を呼びに行ったり、満理子をつれてきて、落とし前をつけさせようと、意気揚々と、飛び出していくものなど、（まあ、ほとんどは、過激派だったのだが。）行動に、移すものに分かれた。

「あああああああ！！んあああああ！！ああ・・・。」

拓斗は、まだ叫び続けている。これで、拓斗のことが好きっ！！って人は、減っただろう！！

すると、二つめのグループのおかげで、先生が、駆けつけてきた。

先生は、周りの野次馬に、校長先生がいるのを見て、顔を、しかめた。そして小声で、悪態をついた。

「これじゃまるで、赤ちゃんを、私だけ大量に押し付けられたみたいじゃないか!!」

けど先生が、『赤ちゃん』というのわかる気がする!!だって、拓斗は、全然しゃべらないんだもの!!

『あ』や、『う』とか、『ん』以外は!!

そして、先生は、まだ小声で悪態をつきながらも拓斗にちがついて、2、3言ささやいた。

すると拓斗は、おとなしく先生の後について行った。

私は、頬に、生暖かいのが流れるのを感じて、あわてて、ぬぐった。それを見ていた人は、いなかった・・・

<3>秘密

「彼女は、いじめられていたの。それに嫌気をさしたのよ!!」けど死ぬ気は、なかった。けどそこで死んだA子が、地縛霊として、残っていたのお!!」だから、B子は、死んだのよお!!」

香菜は、こわい声を出して締めくくった。

「きやあ!!」

はあ・・・!!

拓斗と、満理子の騒動のせいで、事情がさっぱり分かるまで、我がクラスは、居残りとなったのだ!!

それですいぶん明らかになった、みんながキラードのことを、恐れてる理由が。

1つ。一人の人が、あの噂のベンチ近くで、事故死したから。

まあ、噂によると、何もなくいところで、な・ぜ・か転んで、しかも、普通ならば、死なないぐらいなのに、な・ぜ・か死んだらしいけど!!

2つ、その後を追うようにして、女の子が、自殺したから。

だから、今香菜が言っていたみたいに、地縛霊とか、呪いとか、言われ

るようになって、みんな怖がってるんだ。

花梨がいい例だ。

何でもすぐ信じてしまう花梨は、地縛霊のことを、信じ切ったのだ。だから今も、怖くて、しかめっ面をしている。

ふうん。

この学校は、それで人が少ないのか。呪われている学校なんか、来たくないもんねえ。

私がこの学校を選んだ理由は、これだ、人が極端に、少ないこと。

そして恥ずかしくて、大声で言えないけど、初恋の男の子が、3年生の時に、引越した場所・・・というか、街だから、また会えるかなあと思ったんだ。

だけど、現実には、甘くない！！だって、私は、その子の名前すら知らないんだもの！！あだ名は、たっくんだったけど、それがなんになる？

それに、いくら3年生の時に引越していたとしても、学校が、違うから、（もちろん、特別な小学校に通っていたのよ！！）幼稚園をあがってからは、全然会ってないし、顔もうろ覚えだ！！

「た」は、付くんだろうけど、たがつく人なんて、五万という。

そんな時、「た」の付く、拓斗が入ってきた。

ある言葉と共に。

「こんな時、きょうちゃんがいたら・・・また、三人仲良くできたのかなあ。」

けど、その言葉は、私しか聞き取れなかった。

だって、みんな、『やっと帰れる』とか、『拓斗が来た！！』とか叫びながら、拓斗の周りに行ったのだから！！

私は、記憶の1ページたっくんに、自己紹介した時のことを、思い出した。

確か、美宮響子様。というのが嫌で、普通の人と同じように扱ってほしくて、わざと、本名を言わずに、『きょうちゃん』って言った気がする。

じゃあ・・・じゃあ・・・まさか！！たつくんって、拓斗だったの・・・！！

そうだ！！そ・・・う・・・だあ！！条件は、揃ってたんだ！！

『拓斗』という名前には、『た』が入っている。

確か、拓斗も、3年の時に、引越したらしいし。

顔は・・・似てる気がする？うん！！する！！する！！

びっくり！！こんな偶然があるなんて！！

っというか、こんな秘密があるなんて！！

<4>計画？

とっとなとっとなと。

帰り道、私は、ずうっと考えている。

いくら、条件がそろってるとしても、人違いも、あり得る。

「はあ・・・。」

ずっしりと思い溜息を吐くと、なんか、余計に、へこんでくる・・・。

だって、明日来るかもわからない相手に、『私、きょうちゃんだよお！！ほらあ！！幼稚園の時のお！！』なんて言えると思う？きつついよお。

どうしたらいい？

そんなことを考えているうちに、家についた。

あなたたちは、天皇の孫の家の、イメージって、どんなだろう？キイツと音のなる、古風なドア？大理石の床？目もくらむような、シャンデリヤ？毛皮のソファ？

うんうん。私だって、この学校に行く前は、そんな家に住んでいたし、それが普通だと思っていた。

でも今は、ウィインッと音のなる自動ドア、大理石を真似た、何かわからない怪しいタイル、目もくらんでしまう、雑な明かり、革のソファ、である、入り口の、マンション。に住んでいる、設定だ。え？じゃあ実際は、どうなの？って思った？

友達が家に来てもばれないように、さっきのような、入り口なんだけど。右のエレベーターにのったら、普通の、マンションのようなところに動いて、生活感あふれる家になっている。

けど、左のエレベーターに乗ると、大理石の床と、目もくらむようなシャンデリアと、毛皮のソファと、10人程度の、メイドさんが、待っている。

私の家の説明は、こんな感じでいいかな？

そして私は、天蓋付きベットに身を沈めると、ぶつぶつと、拓斗に、どういようか、考えた。

その日、私の家のメイドさんが、私の、『これだあ！！』に起こされたのは、言うまでもない……

<5>「『これでいこう』と思ったのは、なぜだったか、忘れた。」私は昨日、10人程度のメイドを、何度も何度も起こすきっかけとなった、拓斗への言葉を繰り返しつぶやいた。

下を向いて、ぶつぶつ呟いている姿は、あまりにも滑稽だったようだが。

拓斗が、キラードロードいるのは、わかっている。だって、あと数歩で、あのベンチだから。

何度も拓斗を見る。

風に吹かれて、拓斗の、少し癖のある、髪の毛が、さわさわと揺れる……

これほど枯葉とマッチする男の子が、いるだろうか！！

すうーすうーそろお……りい

気持ち悪いほど静かに、拓斗に近づいていく。

「たあーつくと！！」

つとめて明るく声をかける。

「え？ ああ……響子……。」

どきっ！！

私は、あの癖のある髪をふわあっと振って、ふり向き、澄んだ瞳で、『……響子……』とあまあい声で言われたことに、昨日のセリフが、消えていくのを感じた。

「あっあのお!!」

必死に、昨日のセリフを思い出そうと、身をよじらせた。

「え……えとお……あのお……きつ昨日さあ……」

拓斗が、昨日という言葉に、ぴくつと反応した……やっぱり、落ち込んでるんだ……。

「昨日……帰ってきたときに、『きょうちゃん』って、言ってたよねえ？」

「あ……だからなんだよ!! 分かるだろ!! 俺は、落ち込んでんだよ!!」

おお!! 裏!! う……ちよつと怖いかも……。

「あのおまゝことに言いにくいのですがあゝ引越す前に、天皇さんの家の近くに住んでおりませんでしたか？」

「ああ!! なんでそんなこと!! お前に言わなくちゃっ……え? なんで知ってんの？」

「いやあ……これはあ私も、あの近くに住んでおりましたえゝ『たっくん』というお友達がおりましてえゝ」

拓斗がすすつと表情を変えた。

「まさか!! お前!! 『きょうちゃん』？」

「そう……そーなの!! 『たっくん』!!」

「ええ!! マジでえ!!」

「マジだよ!! 『たっくん』!!」

拓斗の表情が、どんどん変わってゆく……!! 明るく!! 明るく!!

すすごく明るく!!

けど、私は、昨日のセリフと、160。変わっていることについて考えていた!!

私は、そして、拓斗が聞こえないように、そうっといった。

「『これでいこう』 と思ったのは、なぜだか忘れた。つと。」

<6>夢

「たっくん!! 泥団子出来たよ!!」

「うーん。」

誰かが、話し合ってる・・・。

「うーんって、たっくん、ハンバーグ出来たあ?」

「うーん。はあんばーぐう?」

ちっちゃいなあ。5, 6歳かなあ?

はんばあーぐかあかわいいなあ。

「はあんばーぐう? じゃないよお!! どーしたのお!!」

「ねえ。きょうちゃん。」

え!!

よく考えたら、これ、私と拓斗!!

ああ・・・これ覚えてる・・・。

「なによ!! もうっ!!」

「あしたさあ。」

「早く言いなさいよお」

「お友達つれてきてもいい?」

あのととき・・・ああ!! あのととき!!

「いーよ!!」

言わなかったらよかった!!

『だめっ』 と言えばよかった!!

そしたら!! あんな思い!! あんな思いしなくても済んだのに!!

～次の日～

そう。ここ。この日。この場所で、初めて・・・いやだあ!! 思い出したくない!!

「きょーちやーん」

「あー!! たあつくうん!!」

目が・・・覚めたらいいのに・・・。

けど、ほっぺたがない・・・っというか、実体がないときは、どうやって、覚めればいいの・・・。

「お友達、連れてきたよ!!」

「ほんとお？」

ああ!!

せめて、目を、とじれたらいいのに・・・!!

耳をふさげられたらいいのに・・・!!

「ほら!! まりちゃん!! この子が、話してた、きょーちゃんだよ!!」

「え? まりちゃん・・・女の子？」

この時、初めて、失恋したんだよね・・・。

たっくんの友達が、女の子だったなんて!!

もういいや。苦い思い出を、眺めようじゃないの!!
ぐるっ

画面が、変わった。

ああ!! なんてことなの!!

この夢は、私の、悪い思い出ばかり映す気なのね!!

シーンは、遊びが終わって、まりちゃんが、帰った後だった。

ああ。ああ。

覚えてる。

私は、このとき、あの子は、ただの友達だって、思って、自分を、なぐさめていた。

「ねえ。きょうちゃん。」

「なに・・・。」

「ぼく・・・ね。まりちゃんに、こくはくしようかとおもってるの・・・。」

私のなぐさめは、きれいに、闇夜へと散った。

私は、もうこの夢が、終わってほしいとは思っていない。

昔は、よく見てたから。

たつくくんが引越すまでずっと。

二日置きぐらいに。

もちろん、『まりちゃんに、告白しようかと思ってるの……。』

だけで、昔の夢は、終わっていた。

だから、もう、慣れっこだ。

夢の中で、何度も、何度も、失恋する……。

その気持ちには、慣れてるから。

「へえ。応援するよ……たつくくん……。」
うっ

この気持ちは、慣れてないなあ。

なんで、この時、『応援する』なんて言ったか、今でも悔やんでるもの。

夢は……続く……私が、覚えてないだけで……。

続く……続く……続く……！！

<7>『きょうちゃん』

「きょうちゃん！！」

私は、よおーく考える。

まだ、昨夜の夢が、覚えてないのかしら？

けど目の前の、拓斗は、12歳だ。

まさか！！

あの悪質な夢は、あの、12歳の姿でも、失恋シーンを、ながすつもり！？

「あ……ごめん響子……ちょっと、きょうちゃんに、また会えたと思ったら、感極まって……。」

え……！！

現実！？

「いや……いいの、『たつくくん』」

私は、『』を、意識して、言った。

「いや・・・ほんと・・・ごめん・・・『きょうちゃん』・・・」
拓斗も『』を、強調して、返してくる。

「いいよ。きょうちゃん、昔みたいに、呼び合おうよ!!」

私は、自分から強調したくせに、笑顔で、言った。

「ありがとう。きょうちゃん!! そっちも、最初は、『たっくん』でもいいから・・・」

私は、拓斗の、言いたいことがわかって、急いで、言った。

「ううん。たっくん。む・か・し・み・た・い・だよ!! こっちだ
って、たっくんって、呼ぶよ!!」

ここで、『きょうちゃん』ネタは、終わったと思ったんだ・・・

く昼休みく

「『きょうちゃん』!!」

拓斗じゃない!!

だれ!?

私は、けだるそうに、『ハリー・マジック 1』から、顔を、あげた。

「満理子!？」

「久しぶり!! 『きょうちゃん』？」

「う・・・な・・・た・・・?・・・や・・・け・・・ええ・・・
なん・・・」

私は、『うそ!? なんで!? 拓斗から聞いたの? いや、けど、けん
か中だよ・・・ええくなんでえく!!』

と、言ったつもりだったが、満理子の表情からして（満理子は、口
に力を入れて、笑いをこらえていた。

言えてないみたい・・・!!

でも、意味は、分かったみたいで、（だから、笑ってたのか・・・）

「あの、騒動を、見ていた人がいたのよ? 『新入りが、拓斗に、『
きょうちゃん』って、言われて有頂天になった。ホント、拓斗の

ポイント、下がるばかりだわあ』って、言ってたの。」

私は、ちょこっと、不機嫌になった。

「私、有頂天になんか、なってないわ。それに、私が有頂天になって、なんで、拓斗のポイントが、下がるのよ!!」

満理子は、『困ったわね。』とかぶつぶつ言いながら、拓斗を、ずっと見た。そして、私に、ゆったりと、なだめるように、話しかけた。

「私に言われても、仕方がないわ。だって、私も、拓斗のポイントが、下がったってのは、猛烈に、賛成だものお」

「まり・・・」

私の声は、満理子に、かき消された。

「不愉快な、拓斗の話なんて、どうでも、いいのよ。」

「そんな・・・二人は、わかりあって、わかれたの・・・?」

「ううん。けど、今日話し合うわ。」

「そーんなことよりい!! 『きょーおちゃん』? まだ熱心に、泥団子作ってるの?」

「あのねえ。『まりちゃん』そんなあたしが、『泥団子』ばかり作ってるように、見えたの?」

私は、せいっぱい、『』を、強調して、皮肉に聞こえるように、努力した。

「そうねえ。だって『何して遊ぶ?』って私か拓斗が、言ったらあなたは100%『どろだんごお!!』」

って、間髪入れずに叫んでたじゃない。」

私は、顔が、熱くなったことが、わかった。

そして、消え入るような声で、ぼそぼそといった・・・（聞こえたかは、さだかでは、ないが・・・）

「言った・・・かもしれないけど、一国の、シンボルの、私が、言っただけことは、もみ消さなきゃ。」

顔からして、聞こえてないらしい。

その後も、『たっくん』『まりちゃん』『たっくん』『まりちゃん』の順で、来た。

そして、そのたびに、『きょうちゃん』『きょうちゃん』と、言われっぱなしだった。

だから、いつからか、私は、時間が、早く流れていることに、きづかなくなってたのだった。

<8>おうまあゝいがああああああああ!!
は？

ウソだろ・・・。

もう十月う!! (え? 運動会? 書いたら、一万字を、越えるよ!!)

そして、明日は、拓斗と、会う日!? ままままつまさかあ!!

誰か、嘘だと言ってくれえ!!

「わわわわわわわわわわわわわわわわ」

私は、声を出して、ちょこつと落ち着いた。

拓斗に、今日である、10月15日を、頼まれたのは、覚えている・・・。

運動会で、ずっとこけたのも、覚えてる・・・。

裏を返して、言えば、それ以外覚えていない・・・。

「おうまあゝいがああああああああああ!!」

その声は、むなしくも、響いた。

『ああ』と・・・。

<9>やっちった?

・・・。

ええつとお・・・。

こおーゆうのって、なんてゆううんだあけえ?

あ!!

そおーだ!!

『気まずい』だ……。

う……気まずい……!!

横には、拓斗が、いる。

そして、拓斗の、部屋。

拓斗のもの、拓斗の香りに包まれて、私は、ドキマギしていた。

だから、私は、ずうっと、ミスばかりしてた。

もちろん拓斗は、BLAグレイの、(ブラ)の方を取って、私は、グレイだったんだけど、間違えて、拓斗の、(ブラ)に、攻撃してしまい、いたたまれない気持ちだった。

個人でしか、プレイできないという、チョーめんどくさいステージになったので、私と拓斗は、単独で、遊ぶことにした。

私は、そっと、拓斗を、盗み見た。

今から思うと、『盗み』じゃなくて、『がん』だった気がする。

じーっとゲーム画面を見る拓斗……。

ずっと澄んだ瞳が、ゲーム画面を、見つめている。

フワフワと、鬱陶しそうに、癖のある、髪が、肌にあたる。

優雅に、ゲームもする拓斗は、まぶしかった。

私は、自然に、よく考えもせず、ただ、ただ、切実に、そのか細い腕に、どうゆうふうに、筋肉が、詰まっているのか?そして、どこから、そんな、サッカーや、野球のできる、力が湧いてくるのか?などと考え、ふつくらとした、ほっぺたに、『さわりたい』と思った。

そして、私は、ゆったりと、夢心地のまま、ほっぺたに、触った。触った!! さ・わ・った!!

「え?何?」

うん。私も、そう思う。

私は、今でも、なんで、あんな行動をとったのか、不思議でたまらない。

拓斗の香りに、酔ったのかもしれない。

けど私は、そ・の・と・きは、まだ、夢見心地だったから。
私は、にっこりと笑って、言った。

「好きよ・・・たっくん」

あーああやっちゃった？

秋（後書き）

大胆な、響子ちゃんを、見守って、下さい。
まだまだ、未熟ですが。
そして、長いですが。
よろしく願います！！

冬（前書き）

これで、最後となります・・・。
くそ長い、話でしたが、ここまで、つきあってくれた皆様。

ありがとうございました。

冬

<1>プロローグ

恋する乙女は、おしやれをしたいいゝ

いくら、存在的にも、忘れ去られた、『外しては、いけないネックレス』でハイネックしか、着れないって、わかっていたとしても。

ちょこつと、露出できる、服を、着てみたいいゝ

<2>粘る!! すぎる!! ここ大事!!

「・・・。」

「拓斗？」

「・・・。」

「おーい。」

「・・・。」

「えっとお。」

「・・・。」

「ごめんねえ。」

聞いてくれれば、わかるかもしれないけど、『・・・』が、拓斗で、私が、しゃべっている、方です。

ついさっき、告白したのですが、拓斗は、私の手の下で、（ほっぺたに触っているだけだけど）石になっている・・・と、ゆーか、頬の筋肉が、緊張している。

こうにやらあおくのてだ!!

「たっくん・・・。私のこと嫌い？」

「ちっちがっ!!」

成功!! 『同情を引け!!』 大作戦!!

けど、拓斗は、本当に、困ったようだ。私といるときは、しないの

に、キラキラムードが、全開に、なってきた。

そして、苦しそうに、顔をゆがめると、言った。

「俺といても、いいことないよ……。」

「……そんな……!! 適当なこと言わないで!!」
もう。

とっことん同情を引いてやる!!

「満理子に……聞いたんだ……分かれるって言ったわけ……
そしたら……学校で、……女の子と、ベタベタするのに、耐え
られなかったって……。俺といても……辛くなるって……。」
拓斗……。

ああ!!

やってしまった!!

満理子と別れた傷、癒えてないんだ!!

拓斗は、好きって言ってこない、私に、友達だと思って、家にまで
入れてくれたのに……。

もう……終わりだ……。

悲しいけど、しょうがない……粘る!!

「……んなことない……。あなたといて、つらくなる人なんて、
いない!!」

「満理子……満理子がいるよ……。」

「違う!! 満理子は、つらくなんかなかった!!」

「もういいよ……きょうちゃん。ごめんまた、一年後……」

「だめえっ!! 私、つらくない!!」

「きょう……ちゃん？」

だめだ!! もう……余裕がない……。
かつこ悪い……。

「私は……辛くないの……そうよ!! つきあっていること言わ
なきゃいいのよお!!」

頬を、何かが、通った。

自分で分かった。

泣いてるんだ。

「そしたらっ!! 過激派たちも何も言わないわ!! そしたらっ!!
そしたらっ!!」

「きょうちゃん!!」

「俺のためになんか、泣くなあ!!」

「ちがつ!! ちがうう・・・。」

「ごめん・・・そうだね・・・。みんな、満理子と同じってわけ
もないよね・・・。」

そして、拓斗は、立ち上がった。

「返事は、あしたでいい? きょうちゃん。」

私は望みがあるんなら・・・と、うなずいた。

<3>ひよったな・・・拓斗。

拓斗は、次の日休んだ。

「くそっ!!」

私が言うのも分かるでしょ!!

『あしたでいい?』って言ったの誰だよ!!

「くっそひよったな・・・拓斗。」

<4>満理子の謎

「きょうちゃん。」

「ふえ?」

私は『ハリー・マジック 2』から、顔を上げずに答えた。

「たっくんのことだけどさあ。」

「えっ!!」

目の前にいたのは、たっくんの元カノ、満理子だった。

「満理子・・・。」

私的には、昨日『違う!! 満理子はつらくなんてなかった!!』つ
て、なんの根拠もなく言ったことに、後悔していたので、満理子は、
気まずい存在だった。

けど、満理子が言ったのは、意外なものだった。

「今日あそば。」

私は、反射的に、答えた。

「いいよ。」

夕方

「ごめんね。急に、遊ぼうとか言っちゃって。」

「いや・・・いいの・・・。ひまだったしい!!」

実は、今日、『ハリー・マジック』シリーズを、読破しようと思っていたが、・・・という言葉をも、飲み込みながら、私は、笑顔で、答えた。

「で。拓斗のことなんだけど。」

「拓斗お!!」

「何その・・・動揺の仕方・・・。」

「いや・・・なんもない・・・の・・・まじで!! なんもないのよ!!」

私は、満理子の、疑惑の目を押し返すように、叫んだ。

「ふーん。まあ、いいんだけど。きょうちゃんが、たっくんに、告白しようが、しまいが。」

「え・・・ええええええ!! え? え? え? ええ!!」

なんで知ってんのよと、言いたかったが、私は、壊れたロボットみたいに、「え」を繰り返した。

「うわっ。分かりやすいねきょうちゃんって?」

「はめたねえ満理子お!!」

「それにしても、遅い!! 告白すんの。」

「え? どうゆーこと? 満理子。」

私は、満理子の顔を探るように、見た。

そして満理子は、怪しげににこっと笑うと、ゆっくりと、口を開いた。

<5>満理子の真意

「私は、まだ、拓斗のことが、好きなのよ。」

「うそ……。」

私は、否定するというより、尋ねるように、言った。

「嘘じゃないわ。」

私は、口をパクパクと動かししたが動揺のため、言葉が出なかった。そんな私を見て、満理子は、落ち着かせるように、話しかけた。

「安心して。たっくんは、あなたのことが、好きなのだから。けど、自覚していなかった。それがつらくて、わかれたの。だって、私といたって、『響子』って言葉ばかり出てくるんだもん。」

「そんな……。」

「ほんとよ。すぐに、私の、お友達に、移り変わるように、あんな、強烈な、別れ方をしたんだから!!」

私は、頭がくらくらしてくるのを感じた。

そして、きずいたら、満理子の言ったことを、ぶつぶつと、おうむ返しをしていた。

「満理子は……拓斗のことが、好き……拓斗は、私のことが好き?……けど……自覚してなくて……それが、満理子には……辛くて……『響子』って言葉が、いっぱい出てきて……私のために……強烈な別れ方を……した……?」

「ま、そゆーこと。」

私は、混乱して満理子に、すがるような目で、見た。

「そんな目で見ないでよ!!」

「ごめ……けど……どうしたらいいか、わからなくて……」

「はあ?どーしたらいいって……つきあったらいいじゃん。拓斗と?」

「え……けど……断られるって……私なんか……」

私は、下を向きながら、もごもごとまくしたてた。

「……大丈夫。あなたなら。」

「満理子……。」

<6>拓斗は、悩む。拓斗が、ナレーションで、「」のないものは、拓斗です。」

・・・。

どーしょ・・・!!

きょうちゃんは、友達と・・・思ってたのに・・・。

僕は・・・誰が・・・好きなんだ・・・

『満理子には、ふられたし、響子も、嫌いでもないだろう。好きって言っとけ!!』理性が、ささやく。

『バカ言え!! 満理子のことをほっておくには、早すぎる! まだ、満理子との思い出に酔いたいんだ!!』

本能が、叫ぶ。

どうしたらいいんだ?

理性の、言う通りにした方が、いいだろう・・・。

思い出に酔ったって、満理子は、帰ってこない。

「満理子・・・忘れられない俺を、どうにかしてくれ・・・。」

声に出すと、少し、気持ちいが、すっきりした。

そして、もう一度、本能と、理性に、意見を聞くことにした。

『あんなに、満理子は、俺の事嫌ってんだぜ? 見込みは、ないさ。』

ところが、響子としたら、見込どころか、ぜえったいつきあえる段階まで来てるんだぜえ? ちたあ頭使えヨ。』理性は、少し、おしめできた。

『響子とは、今まだ通りの位置がいい!! 満理子は、恋人、響子は、親友。昔から、そうだったろ!! やる前から、あきらめてんじやねえよお!!』本能は、叫び散らした。

僕は二つの意見は、全部、自分の意見だから、両方に、行きたがっていた。

真反対なのに。

響子も、満理子もほしくて、二人ともを、恋人に、したがっていた。

そんな僕を、本当に、好いてくれるの？

キヨウコ

ネエ

キヨ

ウチャン

「僕は、好きだヨ……。」

あ……僕は、きょうちゃんのことを、好きだったんだ。

最近、満理子といっても、きょうちゃんの事しか、考えてなかった。

そんなに、好きだったんだ……。

いつの間にか、僕は、満理子より、きょうちゃんのことを、好きになっっていたんだ。

僕は、きょうちゃんのこと、好きだ。

好きだったんだ!!

そうなら!! もう嫌いにならせたりしない!! もう、女の子の、手は、離さない!!

そのためにも、睡眠だ……。

その日、僕は、39度5分という、おっそろしく高い熱を出して、寝込んだ。

口から出た言葉は、もちろん。

「俺は……何してるんだあ？」

だった。（もちろんじゃないか（笑））

<7>拓斗が・・・来た！！（ナレーションは、いつもどおり、響子ちゃんです。混乱しないでネ？）

「おお！！拓斗！！久しぶり！」

「おい！！てめーがいねえから、3組に、負けたぞお！！」

「てめえの、あの剛速球がないと！！ぼろ負けだぜ、俺らは。」

「わりい、わりい、こーねつだしちまってよお！！」

あつという間に、拓斗は、男子に囲まれてしまった。
が。

その男子は、はねられ、過激派に、取り囲まれた。

「もおーう？拓斗がいないとお、つまんなかったあ？」

「ねえ？早速ういしよに遊ぼうよお？」

「いいよ。」

ああー！！イライラする！！お前らのための、拓斗じゃないんだぞ
おっ！！

「あつけど待って。」

「ええ」

え？拓斗？ま・・・まさかあつ！！

「きょうちゃん。中休み、返事するね。それでいい？」

「あ・・・はい。」

私は、耳まで、真っ赤っかになった、ええーんみんなの視線感じる
よお！！

拓斗は、そんな私をさっしてか、くるりと、過激派の方を、むいた。

「そんなわけで、あそぼっか。」

「何言ってるの。拓斗？遊ぶ前に、質問に、答えて。質問って、なに、わざわざ、中休みじゅう話さなきゃならないこと？」

「まさか！！告られたの！？拓斗！！」

「何言ってるの。BLAグレイの、POP^{ピョ}どこで買うかって話なんだ。」

え!?!隠した・・・?まさか・・・私を、過激派から、守るため!?!
ってか、○SPバー^ビジョン出たの!?!?
次は、どうやって、2万円巻き取るか……。いやっけど、新しい
もんだから、4万は、するかも。

<8>返事

「あの・・・告白の、返事だけど・・・。」
きたきたきたきたきたきたきたきたきたきた!
来たよ!!!

決断の時があっ!!!

って、決断すんのは、拓斗やけど?

「うん・・・。」

「俺・・・あの・・・満理子のことは、忘れられないけど・・・。
ああ!!!めんどくさいっ!!!俺は、お前のが好きなんだ!!!」

「え・・・。」

「だから!!!俺の返事は、『満理子のことで、何らかの、迷惑を、
かけるかもしれないけど。。。お前のことを、好きだからっ!!!
迷惑なのは、わかってるんだけど・・・つきあってくれえっ!!!』
だ・・・。」

「嘘・・・迷惑なんかじゃじゃないわ!!!ホントなの?拓斗・・・
つきあってくれるの?」

「うん・・・こちらこそ・・・いいの?こんな僕で?」

「いいどころか、嬉しいわ!!!」

<9>約束と相談

「やっぱり・・・デートは、クリスマスだよ!!!」

私は、いきんで、香菜に、言った。

「あのねえ。私にね、『遊ぶ』って言いたくせに、なんで、さつき
から、こんなことばかりしなきゃいけないのよ!!!私は、遊びた
いのにい!!!」

そう、拓斗と、つきあい始めて、1週間（え？飛ばしすぎだって？あなたは、また8千字読みたいの！？）

たったのだが、いっつもどちらかの家で、ゲームするだけだったの
で、デートらしいデートを、12月25日、そう、クリスマスに、
デートすることに、決めたのだ。

まだ、ずいぶんあるが、準備は、早い方が、いい。
と、言うことで、香菜に、相談しようとしているのだ。

「冷たいこと言わないで？ネエ。服は、どれが、いいと思う？」

「これが、いいんじゃない？この、ちょっと、露出しているところ
が、いいのヨ」

「へえ〜どれ？どれ？」

「これ！！これ！！」

香菜が、指してたのは、もちろん、ハイネックじゃなかった。

けど、その時、皆さんもだろうだけど・・・ネックレスの存在なん
か、忘れていた。

だから、私は、陽気に、こう答えた。

「これにしようちよかわいい！！」

「デシヨ。」

「いっしょ買いに行つてえ」

「え〜私も、忙しいのにい〜。てか、あんた、これ高いよ。」

「はあ！？何円？」

「ざっと、3万」

「う・・・私を、なめんなよ！！」

「うわっ！体、壊すなよ。」

「何すると思つてんの・・・。」

「じゃあ、2週間後の、11月、14日で。」

「よしきた。」

<10> 競り落としに、大切なのは、引くと見せかけて、

自分の、望んでるとこ

まで、落とすことだ。

「4万!!」

「あのねえ。これ誰の金だと、思っ^てんの。1万。」

「いいじゃない、服買^うぐらい。3万5千。」

「買^うぐらいで、そんな、大金いりません。2万。」

「おし^ゃれしたい、女の子の気持^ち、わ^かってよ!! 3万4千。」

「安く、オシ^ャレ^すんのが、女の子よ。2万5千。」

「いいの着^{たい}のよ。3万2千。」

「気づかないわよ。安物^だって。2万7千。」

「ええい!! もう、下^げれないわよ!! 3万!!」

「しょうがないわねえ。3万で、手^を、う^ちま^しよう。」

「うし!!」

「『ありがとう』デシヨ。」

「あいあい。『あ・り・が・と・う』。」

注? これは、競^り落^{とし}中^の、響^子ちゃん^と、お^かあ^様です

<11>買^い物

「いや!!」

「いいじゃあ^ん?」

「高いし、出^過ぎ^だし(肌)、香^菜の顔^怖いし!!」

「ち^よつと^お最^後の、顔^怖い^しって何^よ」

「ほん^とのこ^と、言^った^まで^よ。」

「なにそ^れ!!」

「あ!! これ^いい!! 七^分だ^あ!!」

「ええ^う七^分丈^え」

私^が手^にして^{いた}のは、香^菜の、一^押しの、短^パン^では^なく、七^分丈^で、安^いもの^だった。

「何^言っ^てん^のよ。こ^こか^ら、P S O^の分^の、金^も、浮^かす^のよ^っ!!」

「し・ら・ね・え・し」

「ひどっ」

「ふん!! これでいいもん?」

かわいければ、それでいい!!

私は、1万円、浮かしたのだが、今まで、貯めてた、おこずかいを、出さねばならないのが、分かって、げんなりした表情で、店を、出て行った。

<12>当日、絶頂の時

「映画、よかったねえ。」

「そうだねえ!! やっぱり、ブラックバートは、いいよ!!」
成功だ!!

滑り出しは、いい!! 最高だ。

ちようどしていた、『ブラックバートの秘密』というのを、ふたりで、見たのだ。

もちろん、拓斗は、じいいゝと見て。

私は、拓斗を、じいいゝと、見ていた。

だから、面白かった、と言われても、わからなかったのだが・・・。
あ!! ちなみに、ネックレスは、証だけ、みせないように、服の下に、隠したけど、チェーンは、丸見えだ。

「あそこで、お茶でも、飲もうよ!!」

私は、笑顔で、切り出した。

「うん!!」

うしうし。いいネ。いい調子だヨ!!

「り・・・じゃなくて、コーラ。」

「僕も、コーラ。」

ああ!! ひやひやしたあ!!

リングジュースって、言いそうに、なったあ!!
それにしても、炭酸だめなんだけどなあ。

「ねえ。拓斗?」

「何？きょうちゃん？」

「PS○^ビって、いつ買う？」

「ああ。じゃあ。近くに、ゲーム屋さんあるから、もうちょつとしたら、行こう。」

「うん！！」

よしよし！！

いい！！いい！！

金、たりると、いいけどなあ。

「コーラ二つ。お持ちしました。」
げえ。

炭酸だめだってばあ。

「何色にする？」

「私は・・・ピンク。」

「これだね。」

私は、PS○^ビを、選んで、いるのだが、いっぱいあるなあ。

「じゃあ。次、カセット買おう。」

「うん。」

あれか。

な！！なんて、きれいなんだ！！

「あ！！D○^ビより、綺麗になってる！！」

私は、興奮して、拓斗を、見た。

「だろ！！だから、どうしても、ほしかったんだよお。」

「ねえ。かったら、すぐさあ、外のベンチで、対戦しない！？」

「お！！いいねえ。」

「あ、操作方法分かる？」

「さっぱり・・・。」

「簡単だって！！○S^ビと、ほとんど、一緒だからっ。」

私は、この後、『対戦しよう。』と言ったことを、悔やむように、

なる。

けど、その時は、まだ、知らない。

<13>オマケ／拓斗、一目惚れ／

「おかあさん。」

「ん？」

「ぼく、ひよこぐみより、さなぎぐみが、よかったよ。」

「私は、さなぎなんて、気持ち悪くて、やだけどなあ。」

「おおきくなったら、かぶとむしに、なるんだよ。」

「チョウチョよ。」

「・・・おかあさんの、ばかっ!!」

だだだだだだだ!!

おかさんの、ばか!!

ぼくは、さなぎぐみが、よかったのに、ゆめを、ぶちこわしやがって!!

いいもん!!

・・・けど、ひよこは、やだな。

しょうがない。がまんして、せきすわるか。

かたん。

「ねえ。ヨコいい?」

「え?」

・・・かわいい。

「なまえは?なんていうの?」

「まりこ。まりちゃんだよ。」

「ぼくは、たつくん。ぼくのよこになったからには、まもってやるよ!!」

「え?」

「ひよこは、おおきくなったら、ゆうかなな、にわとりになん
だよ!!」

「う・・・うん？」

「おかあさん。」

「ん？」

「ぼく、ひよこぐみで、よかったよ。」

「へえ。」

「ちようちよと、にわとりは、どっちが、つよい？」

「鶏かな？」

「でしょ！！ちようちよだったら、まもれないもん！！」

「ふーん。がんばって、守りとうすのよ。その、女。」

「うん！！おかあさん。ずっと、まもるよ！！」

「・・・ずっとじゃ、疲れるわよ。拓斗^{にわとり}も、その女^こも。」

<14>当日、最悪の時

「ん！！」

「ああ！！きゃきゃきゃ！！わあ！！」

分かるかもしれないけど、うるさい方が、あたし。

だって、すっごくリアルなんだもん。

テテテテッテン！！

「よし！！クリアっ！！」

・・・。

てかなんか・・・たつくんで・・・。

「たつくんでさあ。このブラックバートのことになると、かわいいよねえ。」

「そっそうかなあ？」

「うん。めえっちゃんカワイイ。なんか、『素』って感じ？」

「ほんと？」

「うん！！」

「あれえ？きょうちゃん。ネックレス、してたの？」

あ・・・やばい。

見つ見つかった!!

ええっと、話を、そらそう!!

「あ、うん。それよりさっ!! あのおくほら、ホワイトバアト伯爵
ってさあ。いつ意外と強いねえ。」

「きょうちゃん? 『あっうん。』 って・・・柄、てか、飾り、見し
てよお。」

そ!! そらせなかった!!
どうしよう。

ホワイトバアト伯爵ネタを、押してみよっと。

「それより、ホワイト・・・ああ!! めんどいから、ホーバア伯爵
で、いい?」

「なんで、見してくんないの?」

なんで、しつこいのよ?

ここは、さらっと、流す作戦ね!!

「だって、変だし。それより、ホーバア伯爵の、技、全部、強かつ
たよねえ。」

「ねえ。きょうちゃん、なんか、隠してるよね?」

するどい・・・。

ううう直視できないよ。

ふいっ

「なんも、隠してないよ・・・。」

「見してよ。」

え!!

やばい!!

「見してよ。なんで、隠すの?」

拓斗・・・もうしょうがない・・・。

見せよう。

それでも、拓斗は、去って、行かないって、信じてるから。
すっ。

「え．．．それ．．．。」

拓斗は、私を、じっと見て、ゆっくり、言った。
「きょうちゃん。きみ．．．内親王なの？」

―完―

冬（後書き）

今まで、ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6949p/>

内親王の彼氏は一般人！！～わかるまでの一年～

2011年3月27日14時45分発行